ポウプの作品に見られる表現媒体としての韻文の可能性(1)

福　本　宰　之

I

ポウプ（Alexander Pope）は，なぜ自らの感情や意見を表現する媒体として韻文を選んだのだろうか。もちろん，当時の文壇の一般的な見方として「韻文が散文よりも，高位に置かれていた」という事情があった。因みにその中でも，最高位は韻文で書かれた叙事詩であった。こうした表現媒体の序列が，三文文士にあれほど激しい喧嘩を売るプライドの高いポウプに，韻文を選ばせた理由の一つであることは疑いを容れない。しかしこの理由は，多かれ少なかれ他の詩人たちにも当てはまるものであって，他ならぬポウプが韻文を選んだ独自の理由とはなり得ない。例えばポウプは *An Essay on Man* を「エッセー」と銘打っているにもかかわらず，なぜ韻文で書いたのだろうか。ここで誤解のないように補足しておくが，現代我々が考える程には，当時「エッセー」は散文で書くものと決まっていたわけではない。ポウプ自身にも *An Essay on Criticism* や *Moral Essays* といった韻文で書かれた「エッセー」があったし，ポウプ以外にも An Essay on …という題の韻文を書いた人は，17，8世紀には数多くいた(2)。とは言うものの，ポウプ自身やはり『人間論』は本来散文で書くべきものと認識していたようで，『人間論』の冒頭に付した“The Design”という一種の前書きの中で，次のように述べている。

① This I might have done in prose; but I chose verse, and even rhyme, for two reasons. The one will appear obvious; that principles, maxims, or precepts so written, both strike the reader more strongly at first, and are more easily retained by him afterwards: The other may seem odd, but is true, I found I could express them more *shortly* this way than in prose itself; and noth-

ing is more certain, than that much of the *force* as well as *grace* of arguments or instructions, depends on their *conciseness*.(*TE*, vol. 3-i, 7-8　下線筆者[3])

一読すれば明らかなように，韻文という形式に拘った理由が二つ挙げられている。このうち，下線部を施した「(散文より韻文で書いた方が)，最初に読者の胸をより強く打ち，後々まで印象に残りやすい」とは，具体的に韻文を活用したどのような事例を念頭に置いているのであろうか。実は，そこには，彼の wit というものの捉え方が深く関わっている。しばしば指摘されることだが，wit という語はそれ自体でも実に様々な意味を持っており，ポウプ自身の作品に限っても意味は一定していない。以下に，彼が『批評論』で与えている代表的な定義を挙げておく。

② *True Wit* is *Nature* to Advantage drest,
What oft was *Thought*, but ne'er so well *Exprest*,
Something, whose Truth convinc'd at Sight we find,
That gives us back the Image of our Mind:
(297-300)

当たり前のことだが，文学のテキストとは，作者のメッセージを読者に言葉によって納得させる装置である。ところが，②の引用が証しているのは，ポウプにとって，読者を説得する際に，この文学の正攻法とも言うべき，言葉によって理屈を説くというやり方に加え，もう一つ補助的なチャンネルが存在するということである。それは理屈を越えた次元で，一目見ただけで「なるほど」と思わず膝をたたくような経験をさせることで，生理的に感得させるというやり方である。

本稿ではポウプの作品から三箇所を俎上に載せ，それらを分析することで，①の下線部で述べられている発想がどのように実践されているかをまず検討し，さらにその発想自体が一体どこから得られたのかという点について考え，最後にポウプが韻文という表現媒体をどのように捉えていたかという問題を，散文との対比を通して考えてみたい。

II

まずは『批評論』より。この作品には，上で述べたようなポウプの発想が実践されている所が数多く見られるが，以下に代表的な箇所を挙げておく。これは三文文士たちの書く詩行に見られるリズムの単調さ，虚辞や単音節語の濫用，及び行末に置いて韻を踏ませる語の音や組み合わせのマンネリ化を茶化した箇所である。

③ These *Equal Syllables* alone require,
Tho' oft the Ear the *open Vowels* tire,
While *Expletives* their feeble Aid *do* join,
And ten low Words oft creep in one dull Line,
While they ring round the same *unvary'd Chimes*,
With sure *Returns* of still *expected Rhymes*.
Where-e'er you find *the cooling Western Breeze*,
In the next Line, it *whispers thro' the Trees*;
If *Chrystal Streams with pleasing Murmurs creep*,
The Reader's threaten'd (not in vain) with *Sleep*.
(344-53)

この詩行を見ると非常に巧みに構成されていることが分かる。まず，2行目“*open Vowels*”（開母音）が耳障りであることを謳った行では“Tho' oft,” “the Ear,”“the *open*”といった開母音を実際に1行内でたたみかけるように連ね，“tire the ear”（耳障り）であることを実証しているし，虚辞の濫用を戒めている次行では，実際に虚辞“do”を使い，その次の10個の単音節語から成る行を戒めている行は，実際に10個の単音節語を用いて書かれている。さらに，ポウプが“still *expected Rhymes*”（毎度お約束の脚韻語）と呼んでいる“breeze”と“trees”の組み合わせが，350と351行目の脚韻を構成する語として実際に行末に置かれている。こうすることで，350行目と351行目を読んだ読者は，ヘボ詩人が書くマンネリ化した脚韻を伴う詩行を実際に体験出来る仕掛けになっている。無論同じことは次の352行目と353行目についても言えるが，こちらはさらに一ひねりある。つまり“sleep”という語を末尾に配することで，『批評論』の読者は「読者は退屈して最後には眠り込んでしまう」

という言葉によるメッセージを読むと同時に，現実に結末部で“sleep”（眠り）に行き当たるよう工夫されているのである。このようにメッセージを言葉で伝えるのではなく，実際に体験さすということに主眼を置いたテキストを，従来の「読むテキスト」に対し，本稿では「経験するテキスト」と呼ぶことにする。

III

さてポウプの「経験するテキスト」—あるいは読者にある idea を体験さす詩行と言った方が適切かもしれないが—の基本形を③の例で確認したところで，その応用編とも言うべき例を次に確認したい。次の引用④は1743年に出た4巻構成の『ダンシアッド』の第4巻の末尾の6行，つまり『ダンシアッド』全体の最後の6行である。

④ Nor *public* Flame, nor *private*, dares to shine;
Nor *human* Spark is left, nor Glimpse *divine!*
Lo! thy dread Empire, CHAOS! is restor'd;
Light dies before thy uncreating word:
Thy hand, great Anarch! lets the curtain fall;
And Universal Darkness buries All.
(IV, 651-56)

この6行に関しては，ポウプ自身が第4巻冒頭に付した Argument でも述べているように，最終的に愚鈍の女神の支配が完遂し，闇と混沌が全てを覆う様を描いたもの，という解釈が一般的である。但しこの解釈は，あくまでこの6行が持つ象徴的な意味を言い当てたものに過ぎないのではないだろうか。それでは，この6行が直接描いているのはどんな場面かと言うと，ずばり，『ダンシアッド』の読者が眠り込んでしまう様子ではないだろうか。つまり「輝きが失われる」「混沌が復活する」「カーテンが下ろされる」「全てが闇に包まれる」といった描写は全て，読者の頭の中の様子，すなわちその心象風景を描いたものではないだろうか。それを裏付けるような箇所が，この結末部の直前に見られる次の二つの引用である。

⑤ More she had spoke, but yawn'd—All Nature nods:

What Mortal can resist the Yawn of Gods?
(IV, 605-6)

⑥ In vain, in vain,—the all-composing Hour
Resistless falls: The Muse obeys the Pow'r.
(IV, 627-28)

実は「読者が眠り込んでしまう」という結末を予期させる箇所はこの２つだけではないのだが，とにかくこうした前置きがあるからこそ，引用④の結末部は「読者が眠り込んでしまう」様を描いたものだ，という読みが表の意味として浮かび上がってくるのである。そう考えると，先に述べたように，この④が『ダンシアッド』全編の末尾に置かれている理由も明白となる。つまり最後の１行「普遍的な暗闇が全てを包む」が，読者が眠ってしまうことを意味するのであれば，当然，読者は『ダンシアッド』という詩をそれ以上読み進めることは出来ない。従って，必然的に詩もここで終わりにせざるを得ない。④が『ダンシアッド』の末尾の言葉となっているのは，そういった理由からなのだ。最後に眠りが出て来るという点は引用③と似ているが，既に述べたように引用④の方は読者の心象風景を叙したものである。何れの場合も，読み手はテキストを読むのではく，体験するのである。

また④に関連して，思い出さねばならないのが，『ダンシアッド』という作品自体が駄作の mockery（ここでは「擬態したもの」というくらいの意味である）として意図されているという事実である。一番分かり易いのが，どうでも良いような些末な点に長々とした解説を加えている，本文に付けられた冗長な注釈であろう[(4)]。このように，『ダンシアッド』が退屈な駄作として提示されているからこそ，睡魔に負けた読者が眠り込んでしまい，それ以上１行たりとも先を読み進められなくなるという実体験をさす結末部が，一層リアリティーを帯びたものになってくるのである。

IV

さてこのように idea を体験さすというポウプのストラテジーが活かされているのは，③や④のように，三文文士の駄作を嘲る場合のみに限られるものではない。もっと巧妙な仕方で行われている場合もある。次の⑦は，*Windsor-Forest* からの引用である。

⑦ Here waving Groves a checquer'd Scene display,
And part admit and part exclude the Day;
As some coy Nymph her Lover's warm Address
Nor quite indulges, nor can quite repress.
(17-20)

これは行数が示しているように，『ウィンザーの森』の冒頭近くの一節であり，ウィンザーの森の様子を描写した箇所である。引用⑦がなぜ③や④と同じく「経験するテキスト」となるのか，一読では判然としないであろう。『ウィンザーの森』は1713年に出版されたが，同年4月にスペイン継承戦争が終結，ユトレヒト条約が批准されイギリスに平和が訪れた。実はこの『ウィンザーの森』という詩は，このスペイン継承戦争の終結と平和の到来を言祝ぐという目的で書かれたものなのである。このことが最も端的に表れているのは，例えば後で触れる⑨のような箇所であろう。つまりこの詩は，単に森の自然の美しさを称えた作品ではなく，政治的なメッセージを含んだものであった。ところで，スペイン継承戦争が勃発したそもそものきっかけは，スペイン王のカルロス2世（Carlos II）が王位継承者としてフランス王ルイ14世（Louis XIV）の孫アンジュー公フィリップ（Philip, Duke of Anjou）を指名して，亡くなったことにあった。アンジュー公は元々フランス王の孫であり，フランス王位の継承権も当然持つわけで，彼がスペイン王位の継承者として指名されたことは，当時ヨーロッパの二大強国であったフランスとスペインの合体を意味した。これは当時のヨーロッパの Balance of Power（力の均衡）を崩すことに他ならない。最終的にイギリスを含む同盟国側に有利な形で戦争は終わり，アンジュー公は フェリペ5世（Felipe V)としてスペイン王位には就いたが，フランス王位継承権は放棄した。これによりヨーロッパの力の均衡はかろうじて保たれ，Balance of Power という語は，ユトレヒト条約の条文においても，第6条に挿入された文書に，わざわざ盛り込まれた。これが次の引用⑧である。

⑧...for obtaining a general Peace, and securing the Tranquillity of *Europe* by a Ballance of Power, he of his own proper Motion, of his own free Will, and without any Constraint, renounced for himself, for his Heirs and Successors for ever and ever, all Pretensions, Rights, and Titles, which he, or any of his Descendents, have

at present, or may have at any time to come whatsoever, to the Succession of our Crown:...（下線筆者）

全体としては，「力の均衡により，ヨーロッパの平和を維持するために，スペイン王がフランスでの王位継承権を放棄した」という内容が述べられている。以降，この Balance of Power という考えが，イギリス外交政策のキーワードの一つとなった[(5)]。そしてこの Balance of Power という言葉の持つ響きは，単に外交上の問題に留まらない。国王殺しに至る革命を見た，17世紀の極限状態の記憶が生々しいイギリスにとって，Balance of Power（力の均衡）こそ，前世紀とは対極をなす普遍的な理想を表していた。随分前置きが長くなったが，改めて引用⑦を見てみたい。実はこの描写は読み手に，ユトレヒト条約が理想として高らかに謳う Balance of Power が醸し出す安定感，安心感を，韻文の技巧面で体験さすという狙いを孕んでいるのである。詩行の構造に注目すると，2行目で“admit”と“exclude”という反対の意味を持った動詞が同じ“and part”という句に先導されながら，文字通り balance よく配置されている。さらに4行目では同じように，“indulge”と“repress”という反対の意味を持った動詞が，やはり同じ“nor quite”という言葉に続き，互いに balance を取っている。さらにこの似たような構造を持った最初の2行と後の2行が“As”という接続詞で結ばれ，両者に相似関係が成り立っていることが示されている。

続いて同じ作品からの別の引用を見てみよう。

⑨ At length great *ANNA* said—Let Discord cease!
She said, the World obey'd, and all was *Peace*!
（*Windsor-Forest*, 327-28）

この詩には，この⑨のように，直接言葉でアン女王（Queen Anne）によってもたらされた平和，新しい世界秩序を称えるという箇所がある。しかし，この詩がスペイン継承戦争の終結と平和の訪れを言祝ぐ詩として成り立つ所以は，それだけではない。言葉による idea の伝達という⑨のような箇所と同時に，⑦のように，韻文の技巧をフルに活用して idea を体験させるという箇所も存在しているのである。つまり，ヨーロッパというマクロコスモスの新しい秩序の基礎となる Balance of Power と，正しく同じ「力の均衡」が醸し出す安定

感，安心感をテキストというマイクロコスモスの上で直に体験させ，その価値を読み手に感得さすという，非常に精妙なストラテジーが存在しているのである。(6)

V

さてこれまで「経験するテキスト」の例を3箇所取り上げて，検討してきた。これまでの議論を一まずまとめておくと，②の引用にあるように，ポウプにとってwit とは「それが真実であることが一目見ただけで確信出来，頭の中でぼんやり描いていたものをくっきりとした映像にして返してくれる何か」であった。そして，これを表現面で実践したのが，③，④，⑦で見てきた「経験するテキスト」というストラテジーであり，そのためには韻文という形式が重宝であった，ということになろう。それではさらに一歩進んで，ポウプをして散文ではなく韻文という形式を選ばさしめた，この「経験するテキスト」という発想は一体どこから生まれて来たのだろうか。次にこの点を考えて見たい。

当時の時代思潮に「経験」というキーワードを照らし合わせて見た場合，すぐに思い浮かぶのがロック（John Locke）の名前であろう。ロックの考えを簡単に説明しておくと，彼は生得知識―つまり人が生まれついて持っている知識―を否定し，生まれたばかりの赤ん坊の心をタブラ・ラサ（tabula rasa）「何も書いていない石板」に喩えた。そしてあらゆるidea は経験によってのみ得られると主張し，イギリス経験主義哲学の祖となったのである。まず確認すべきは，そもそもポウプはロックを読んでいたのかという点であろうが，この点は疑いを容れない。例えば *Moral Essays* や『ダンシアッド』ではロックへの言及が見られるし，*Memoirs of Martinus Scriblerus* には，ロックの思想を揶揄する箇所が散見される。*John Locke and English Literature of the Eighteenth Century* の著者マックリーン（Kenneth MacLean）によると，ロックの考えがイギリスで人気を得るのは1725年以降であって，ロックとの関連で先に名前を出した *Moral Essays* も『ダンシアッド』も，『マータイナス・スクリブレルスの回想録』も全て1725年以降に出版された作品である。しかしながら，例えばその主著 *An Essay Concerning Human Understanding*（以下『人間知性論』と呼ぶ）の第2巻11章第2節において，ロックはjudgement とwit に関し「前者は一見類似しているidea の間に相違を認める能力であり，反対に後者は一見異なるidea に類似点を認める能力である」と規定し，judgement とwit を対比的・相補的な能力と捉えているが，それと符合

するように，ポウプの『批評論』には引用⑩のような箇所が見受けられる。

⑩ For *Wit* and *Judgment* often are at strife,
Tho' meant each other's Aid, like *Man* and *Wife*.
(82-83)

一読すれば明らかなように，wit と judgment が夫と妻に喩えられ，互いに助け合うものであることが述べられている。『批評論』が出版されたのは1711年であり，もしこの⑩の内容がロックの影響を受けて書かれたものだとすれば，一般的にロックが英国内で人気を得る1725年以前に，ポウプは既に『人間知性論』の内容にかなり精通していたと言えるであろう。

このように，ポウプがロックを読んでいたことは間違いない。そこで，改めてロックの考えを詳しく見ていくことにしよう。彼の主張のエッセンスは既に述べたように，「あらゆる idea は経験によってのみ得られる」というものである。この中心概念から派生した，興味深い一節が『人間知性論』の第３巻11章第14節に見られる。これが引用⑪である。ここは，ある単純な idea を人に説明する際，もしその idea を表す名前を使っても理解されないか，誤解されそうな場合どうすれば良いか，に答えている部分である。

⑪ *First*, Sometimes the *naming the Subject, wherein that simple* Idea *is* to be found, will make its name be understood by those, who are acquainted with that Subject, and know it by that name. So to make a Country-man understand what *Feuillemorte* Colour signifies, it may suffice to tell him, 'tis the Colour of wither'd Leaves falling in *Autumn*. *Secondly*, But the only sure way of making known the signification of the name of any simple *Idea*, is *by presenting to his Senses that Subject, which may produce it in his Mind*, and make him actually have the *Idea*, that Word stands for.（下線筆者）

この引用⑪の後半部分，すなわち下線を引いた箇所に注目すると，この理屈が引用③，④，⑦で見てきた「経験するテキスト」というポウプの用いたストラテジーに活かされていることが了解出来る。つまりポウプの「経験するテキス

ト」という発想は，ロックの言う「とある単純な idea が如何なるものであるかを教える，唯一確実な方法とは，その idea を心の中に生み出したり，引き起こしてくれるような現物を読者の五感に突きつけてやることだ」という考えに基づいているのである。そしてこの「現物を読者の五感に突きつけてやる」という発想こそ，冒頭の引用①の下線部において，「最初に読者の胸をより強く打ち，後々まで印象に残りやすい。だから『人間論』も韻文で書いた。」とポウプが言う時，その正当性を裏付けているストラテジーなのである。

VI

さて，ポウプがこのように韻文の存在理由を，一見して込められたメッセージを感得させるその簡潔さに見ていたことは，彼が対照的に散文の冗長さを事有る毎に揶揄していることからも，逆に証せられる。ここで若干唐突な話になるが，実はポウプは韻文の作品中において novel（小説）という言葉を一度も使っていない。正確には，novel という語自体は一度だけ *The Odyssey* の英訳の中で使っているが，それは「新奇な」という意味においてである。OED によると「小説」という意味での novel という語が17世紀に既に使われていたことや，『ダンシアッド』においてデフォーが揶揄されていることを考え合わせれば，ポウプが novel（小説）という語を一度も使っていないという点は，少し意外に聞こえるが，事実である。それではポウプにとって prose とは一体何を表現するための媒体であったのかというと，ずばり批評であった。韻文と散文を並置して論じる場合，やや大まかに図式化すると，ポウプは「韻文＝芸術品，散文＝その芸術品を語る言葉」という捉え方をしていたと言えるであろう。例えば次の引用⑫⑬が参考になる。

⑫ To say truth I am weary of translating; I am weary of poetry itself; I am weary of prose (thanks to my notes).

⑬ Thy mighty Scholiast, whose unweary'd pains
Made Horace dull, and humbled Milton's strains.
Turn what they will to Verse, their toil is vain,
Critics like me shall make it Prose again.
(*The Dunciad*, IV 211-14)

引用⑫は，1715年10月11日に ポウプがキャリル（John Caryll）に宛てた書簡の一節で，*The Iliad* 英訳の進捗状況について触れた箇所である。注目すべきは末尾の「(注釈のお陰で) 散文にもうんざりしている」という箇所である。ポウプは『イリアッド』を翻訳する際，本文を英語の韻文にするだけでなく，自分で散文の注釈を付けたが，その手間にうんざりしている様に言及している箇所である。その際に，「注釈にうんざりしている」とは言わずに，敢えて「散文にうんざりしている」と言っている。「散文＝注釈，すなわち芸術品を語る言葉」という彼の認識が表れている箇所ではないだろうか。続いて⑬は，『ダンシアッド』第4巻からの引用で，愚鈍の女神に注解学者ベントレー (Richard Bentley) が話しかけている場面である。ここも⑫と同じで，ベントレーのような注解学者が，ホラティウス（Quintus Horatius Flaccus）やミルトン（John Milton）の韻文作品に解説を加えること—つまり韻文について語ること—が，「それを散文に変える」と表現されている。

それではこの「韻文のテキストについて語ること」すなわち「それを散文にすること」を，ポウプはどう捉えていたのであろうか。それがよく表れているのが次の引用⑭であろう。

⑭ For thee explain a thing till all men doubt it,
And write about it, Goddess, and about it:
(*The Dunciad*, IV 251-52)

これは引用⑬の続きで，相変わらず話しているのはベントレーである。彼が，注解学者としての自らの本分を述べ立てている箇所で，引用箇所にはないが主語は we である。つまり，引用⑬中にあった，注解学者，批評家が韻文作品について散文で語ることとは，ポウプに言わせれば，⑭にあるように「誰もがその信憑性を疑うようになるまで，ある事柄を説明し，それについてとことん書き続ける」ことを意味するのである。簡単に言えば，ポウプは批評家の仕事を，韻文を散文に変えることで元々あった簡潔さを失わせ，却って分かりにくくすることだ，と喝破しているのである。

翻って冒頭の引用①に戻る。ここで『人間論』を韻文で書いた二つ目の理由として，ポウプが説いている理屈，すなわち「韻文のほうが散文より原理や金言，教訓を手短に表現できるから」という理屈を，「奇妙に聞こえるかもしれないが」述べていたが，この引用⑬や⑭から読み取れる彼の散文に対する見方

を踏まえると，ポウプの頭の中では，それが奇妙でも何でもなかったことが了解出来よう。このように，ポウプが韻文の存在価値をideaを伝える際の重宝さに見ていたことは，彼の散文に対する見方と並べてみると，より一層明らかになってくるのである。

そしてこの重宝さを支えているのが，一行ずつのまとまりがはっきりしているとか，音節数とリズムが決まっているとか，行末を脚韻させることが可能であるといった，韻文ならではの，テキストの加工し易さなのである。ポウプはこうした韻文テキストの特性を最大限利用し，ロックから影響を受けた「経験によりideaを伝達する」というストラテジーを実践して見せたのである。ポウプこそ韻文の価値に敏感で，それが孕む潜在的可能性を存分に活用した詩人であった。

参考文献

Battestin, Martin C. *The Providence of Wit: Aspects of Form in Augustan Literature and the Arts*. Oxford: Clarendon Press, 1974.

Boyer, Abel. *The History of the Reign of Queen Anne, Digested into Annals*. London: Printed by D. L., 1713.

Gordon, Ian A. *The Movement of English Prose*. London and New York: Longman, 1966.

Israel, Fred L., ed. *Major Peace Treaties of Modern History 1648-1967*. 4vols. New York: Chelsea House Publishers, 1967.

Jones, David. *The Compleat History of Europe*. London: Printed for Henry Rhodes, 1713.

Jones, John A. *Pope's Couplet Art*. Athens: Ohio UP, 1969.

Locke, John. *An Essay Concerning Human Understanding*. Ed. Peter H. Nidditch. Oxford: Clarendon Press, 1975.

MacLean, Kenneth. *John Locke and English Literature of the Eighteenth Century*. New Haven: Yale UP, 1936.

Nisbet, H.B. and Claude Rawson, eds. *The Cambridge History of Literary Criticism vol. 4, The Eighteenth Century*. Cambridge: Cambridge UP, 1997.

Oldmixon, John. *The Secret History of the White-Staff*. London: Printed by R. Mathard, 1714.

O'Neill, Michael, ed. *The Cambridge History of English Poetry*. Cambridge: Cambridge UP, 2010.

Pope, Alexander. *The Twickenham Edition of the Poems of Alexander Pope*.

Gen. ed. John Butt. 11 vols. London: Methuen; New Haven: Yale UP, 1936-69.
——. *The Prose Works of Alexander Pope*. Eds. Norman Ault and Rosemary Cowler. 2 vols. Oxford: Basil Blackwell; Connecticut: Archon, 1939, 86.
Rogers, Pat. *Essays on Pope*. Cambridge: Cambridge UP, 1993.
Scriblerus Club. *Memoirs of the Extraordinary Life, Works, and Discoveries of Martinus Scriblerus*. Ed. Charles Kerby-Miller. New York: Oxford UP, 1988.
Sherburn, George, ed. *The Correspondence of Alexander Pope*. 5vols. Oxford: Clarendon Press, 1956.
Sitter, John. *Arguments of Augustan Wit*. Cambridge: Cambridge UP, 1991.
Spence, Joseph. *Observations, Anecdotes and Characters of Books and Men*. 2 vols. Ed. James M. Osborn. Oxford: Clarendon Press, 1966.
Tillotson, Geoffrey. *On the Poetry of Pope*. Oxford: Clarendon Press, 1950.
Walker, William. *Locke, Literary Criticism, and Philosophy*. Cambridge: Cambridge UP, 1994.
Wasserman, Earl R. *The Subtler Language*. Baltimore: The Johns Hopkins Press, 1959.
福本 宰之 『ダンシャッド』における書物の量感をめぐる風刺—ブラックモアを手がかりに— (京都大学英文学会紀要 ALBION 復刊第37号, 1991年10月)
——. (口頭発表) *Windsor-Forest* における Balance of Power (18世紀英文学研究会例会, 2007年12月, 於 同志社大学)

註

(1) 本稿は2011年5月に開催された第83回日本英文学会年次大会シンポジアム：「詩のことばと散文のことば 韻文の存在理由を探る」(於 北九州市立大学)における口頭発表に基づくものである。今回活字にするに当たって，内容に加筆・修正を加えた。

(2) 例えば，作者不詳の *An Essay upon the Earl of Shaftesbury's Death* (1682年)やバッキンガム公 (John Sheffield, Duke of Buckingham) の *An Essay on Poetry* (1682年)，パーネル (Thomas Parnell) の *An Essay on the Different Styles of Poetry* (1713年) など。

(3) ポウプの作品からの引用については，すべて John Butt, ed., *The Twickenham Edition of the Poems of Alexander Pope*. 11 vols. (London and New Haven: Methuen and Yale UP, 1939-69)に拠る。なお本稿では *TE* と略記する。

(4) この点については拙論「『ダンシャッド』における書物の量感をめぐる風刺—ブラックモアを手がかりに—」(京都大学英文学会紀要 ALBION 復刊第37号，1991年10月) を参照のこと。

(5) 参考までに，当時の政治的な書き物からこの Balance of Power という考えに言及したものを以下に3点載せておく。それぞれで“Balance of Power”とい

う言葉が使われ，その重要性が訴えられている。無論，この Balance of Power という考えに言及した政治文書はこれ以外にも数多く存在する。

（i）*The Method Your Majesty hath entered into for settling the Balance of Power in* Europe, *the assuring of the Protestant Succession, as by Law Established, in the House of* Hanover, *and endeavouring to procure for Your Allies all just and reasonable Satisfaction,...*
（Abel Boyer, *The History of the Reign of Queen Anne, Digested into Annals* 158, 下線筆者）

（ii）...whereas one of the chief Intentions of the Treaties of Peace now depending between the Crowns of *Spain, France*, and *England*, is the Preservation of *the Balance of Power* in *Europe*,...
（David Jones, *The Compleat History of Europe* 355, 下線筆者）

（iii）*Nothing can be more evident, than that if the* French *King continues Master of the* Spanish *Monarchy, the Ballance of Power in* Europe *is utterly destory'd.*
（John Oldmixon, *The Secret History of the White-Staff* 20, 下線筆者）

(6) この辺りの議論については “Pope: *Windsor Forest*”（*The Subtler Language*, pp. 101-68.）に拠る。

キーワード　アレグザンダー・ポウプ　ジョン・ロック　韻文　経験